

福島原発災害と科学者

宗川吉汪

はじめに

福島原発の原発災害を経験して、原発の恐ろしさを実感した。いったん事故が起きると大量の放射性物質が飛散し、人びとは病気になるかもしれないという恐怖におびえる。特に小さな子どもをもつ母親の心配は並大抵ではない。農業や漁業は壊滅的被害をうけた。それがいまの福島の実情である。

原発は核兵器と同根の軍事技術であり、原発の出す放射性廃棄物を処理する術^{すべて}がない。人間が使ってはならない技術である。それなのに何故原発が導入され、使われ、これほどまでに増えてしまったのか。そこに日本の支配機構、権力構造を見ないわけにはいかない。原子力カムラを生みだした財界・大企業中心の政治体制、アメリカによる軍事支配、そこにこそ問題の根源がある。原発ゼロ運動は、日本の権力構造への挑戦である。

原発ゼロに向けた国民的運動の高まりの中で日本科学者会議の会員としてこの運動に参画する場合、科学者の社会的責任について問いつづけざるをえない¹⁾。

1 科学者の社会的責任を考える糸口

科学者の社会的責任を考える糸口として、まず初めに以下の三つの文章を引用したい。

(1) プレヒト『ガリレオの生涯』²⁾

「私は思うんだ。科学の唯一の目的は、人間の生存の辛さを軽くすることにある、と。科学者が利己的な権力者に脅かされて、知識のための知識を積み重ねるのに満足するようになったら、科学は不完全になり、君たちの作る新しい機械だって、

新たな災厄にしかならないかもしれない。(中略) 何年かの間、私はお上と同じくらいの力をもっていたのに。それなのに私は、自分の知識を権力者に引き渡してしまったのだよ、それを使うも使わないも、悪用するもしないも、どうぞお好きのように、とね。(中略) 私は自分の職業を裏切ったのだ。私のしたような事をする人間は、科学者の列には入れてもらえないのだ。」

(2) 佐々木克之「諫早湾干拓事業と有明海漁量の減少の因果関係論争と研究者の視点」³⁾

「公調委(公害等調整委員会一筆者注)で漁民側に立って発言した6人の研究者の中で現役研究者は一人で、残りはすべて政治的力を受けにくい年金生活者であった。現役研究者が漁民側に立つことが難しいことを示している。中・長期開門検討会議で開門賛成派の多くの研究者が水産試験場長経験者であったのに対して、反対派の多くは大学の研究者であった。現場に近い研究者ほど不可知論(海の現象は複雑で原因説明は困難とする考え一筆者注)に立たない傾向も見られた。(中略) 不可知論に立たないためには、真理に忠実でありたいとか、悲惨な状況の漁民の役に立ちたいという社会的正義や、海の問題を身近に理解しているなどの動機づけが、十分条件とは言えないが、必要条件として存在していると感じる。」

(3) アリソン・ロザモンド・カツ「チェルノブイリの健康被害」⁴⁾

「原子力カムラに属していない独立系科学者(independent scientistsの訳一筆者注)と、健康と環境の活動家たちは、過去24年間、勇敢な努力を続けてきた。チェルノブイリ事故による被害の隠

キーワード：福島原発災害(Fukushima nuclear disaster)、科学者の社会的責任(social responsibility of scientists)、自立的科学者(independent scientists)、科学の価値(value of science)

蔽を白日のもとにさらし、独立した研究によって得られた信頼できる証拠を市民に提供するという努力である。彼らが直面しなければならなかったのは、世界最大の圧力団体（IAEA, WHO, ICRP, UNSCEARなどを指す——筆者注）であったため、その歩みは遅かったが、地道に続けられた。」

2 自立的科学者

筆者は、日本科学者会議の会員であるが、会員の多くが所属する、あるいはかつて所属した大学・研究所も総体としては日本の権力機構の一部である。明治政府は富国強兵のために帝国大学を設立した。戦前の天皇制のもとで権力は、戦争遂行のため、財界の儲けのために大学を使ってきた。戦後もその基本構造は温存されたままで、大学は財界・大資本に奉仕させられてきた。そして今日、国立大学は法人化され、彼らにとってさらに使い勝手のよい大学になった。

しかし一方で、真理を追求する科学・学問は、支配の構造をも暴露せずにはいなかった。理念としての学問の自由、大学の自治も獲得された。戦後の世界の科学者運動は、科学者の戦争への協力の反省の上にとって出発した。日本科学者会議も戦争を拒否し、民衆の側に立ち、日本の科学の民主化をめざす“自立的”科学者の集団であるとみなされている。自立的科学者とはすなわち、あらゆる政治的権力から独立した自由な independent scientists である。

原発は、「核の平和利用」の欺瞞の下で、核兵器開発の陰謀を秘めながら、ひたすら支配勢力の儲けのために導入され、建設され、運転されてきた。原発のために、物理系・生命系・社会科学系を問わず多くの科学者・技術者・研究者が動員された。しかしながら、福島原発事故は原発が軍事技術と同根の人類とは共存し得ない危険な技術であることを白日の下にさらした。

科学者の社会的責任を考える場合、「責任」とは何か問われる。「責任」の字句には「責め」と「任務」の二面の意味がある。福島原発事故に則して言えば、科学者は事故に対してその「責め」を負わなければならないのではないかと、原発の危

険性を見抜き、事故を未然に防げなかった責任が自立的科学者の側にもあるのではないかと。

科学者会議は、一貫して原発に対して批判的であったが、「核の平和利用」としての原発を否定することはなかった。筆者個人が原発に対して否定的であったにしても、原発の廃絶を会の運動にできなかったことに責任を感じる。「責め」を負うことを棚上げにした「任務」（脱原発運動）は、本当の意味で責任を取ることにならないのではないかと。

今回の原発事故による原子力災害は、はからずとも科学者運動の原点を想起させることになった。当面の日本科学者会議の重要課題は、原発の本質を明らかにし、原発の危険性を訴え、原発の廃棄を求めることにある、と考えている。

3 科学者・科学・価値

科学者会議第19回総合学術集会で池内了氏が科学者の社会的責任について論じた。氏の見解は、しかし、科学者一般と自立的科学者を区別せず、権力に科学の独占を許してしまう「科学の価値中立説」に立つのではないかと筆者には思えた。以下、「予稿集」の講演要旨⁵⁾に則して批判したい。

(1) 科学者一般と自立的科学者

池内氏は、予稿集に「科学者は傲慢になり、(中略)科学・技術を抜きにして社会は成り立たないと思ひ込み、自らが社会の主人公であるかのように振る舞い、一種の大衆蔑視の意識をもってしまったのだ」と書く。しかし、科学者は今さら傲慢になったのではなく、権力の側にいることで、もともと傲慢なのではないか。

科学や科学者の位置づけについて戸坂潤は次のように述べる⁶⁾。「元来、科学(一般に文化も亦)は決して人類全般、社会全般のものではなくて、或る特定の而も支配的な社会階級乃至社会身分の、占有物だったのである。」「科学の所有者・占有者はこの『科学者』自身ではなくて、彼らの主人達なのである。」科学者は階層として現体制の権力の一部を構成する。権力との関係を見捨てた科学者論は現実離れしてしまう。

池内氏は「科学者の役割は何であろうか」と問うて、「社会のリーダーではなく、科学の知識を活

かした社会のアドバイザーで」なければならない、と答える。権力の一部である、あるいはそれに奉仕する科学者に社会のアドバイザーが期待できるだろうか。講演の中で、科学者は、科学・技術文明のカナリヤたれ、と述べたが、カナリヤの送るサインは、権力に対してなのか民衆に対してなのか、原発事故に遭遇して、放射線の影響はニコニコ笑っている人には来ない、と鳴いたカナリヤがいた⁷⁾。いま求められているのは、権力から独立し、民衆の側に立つ自立的科学者ではないだろうか。

(2) 科学と価値

池内氏は「科学は、コインの裏表と同じく、人間の幸福に役立つ側面と厄災をもたらす側面の両面がある」と述べ、科学価値中立説に立つ。池内著『禁断の科学』には、コインの裏表が随所に登場し、コンピューターは「価値中立」的な産物とみなされている⁸⁾。科学を没価値とするのが中立説であるが、科学の技術への応用や思想への影響を考えれば、科学のもつ客観的価値を認めないわけにはいかない。池内氏は、また、「科学に対する最も正当な態度は、科学礼賛にもならず、ましてや反科学にならないこと」と述べる。しかし、科学は、しばしば権力に幸福をもたらすが、人民には災厄をもたらす。安倍首相や電力会社は原発を礼賛するが、原発事故被害者で原発を呪う人は多い。

湯川秀樹は、核兵器は「絶対悪」と言った⁹⁾。すると核兵器や原発をつくり出した核物理学（科学）も“絶対悪”ではないのか。少なくとも反科学論者はそうみなす。しかし、多くの科学者は、科学は事実認識だけに関係して価値判断にはかかわらず、その価値は中立で、科学に責任はないと信じている。価値中立説は一種の聖域で、安全地帯であり、都合の悪い時は科学者自らもそこに逃げ込む。

ところが一方、核兵器は世界の平和の維持のための“必要悪”と主張し、いまま核保有国は核抑止政策をとっている。権力にとって核兵器は必要であり、科学や科学者は彼らにとって役に立つ。

結局、聖域とて権力の支配から逃れることはできない。科学の価値中立説は、彼らにとってむしろ好都合である。権力は、何処からも批判されることなく、安心して科学と科学者を自分たちの手

に囲い込むことができる。結果として、価値中立説は科学を権力の手に渡す仕掛けになった。

見田石介は「もっとも客観的なもっとも深い事実判断は、つねに価値判断なのである。新カント派が事実判断と価値判断とを区別するのは、かれらが事実ということをつた直接的事実としてしか知らないからである。（中略）同時に価値判断であるような客観的な概念の判断、これが真に実践の指針たりうる認識であり、また科学の目的である」と述べた¹⁰⁾。価値判断は常に深い事実判断の上に立つてなされるべきである。

おわりに

ブレヒトはガリレオに、科学の唯一の目的は人間の生存の辛さを軽くすることにある、と言わしめた。佐々木克之氏は、真理に忠実であり社会的正義を貫くことが不可知論に立たないために必要だ、と言う。そしてカツツ氏は independent scientistsこそが信頼できる証拠を市民に提供できる、と述べた。国民99%の側にいて初めて科学者は“自立的”科学者になる。

引用文献

- 1) 「討論のひろば 原発を考える」『日本の科学者』47(1)-(12)、(2012)。
- 2) ブレヒト『ガリレオの生涯』（谷川道子訳、光文社古典新訳文庫、2013）pp. 239-240。
- 3) 佐々木克之「諫早湾干拓事業と有明海漁量の減少の因果関係論争と研究者の視点」『日本の科学者』41(3)、142-147(2006)。
- 4) アリソン・ロザモンド・カツツ「チェルノブイリの健康被害」『日本の科学者』48(1)、30-36(2013)。
- 5) 池内了「持続可能な社会への変革とともに」『日本科学者会議第19回総合学術集會予稿集』（2012年9月、岡山大学）pp.30-32。
- 6) 戸坂潤『戸坂潤集』（筑摩書房、1976）p.143。
- 7) 島蘭進『つくられた放射線「安全」論—科学が道を踏みはずすとき』（河出書房新社、2013）p.33。
- 8) 池内了『禁断の科学』（晶文社、2006）p.187。
- 9) 田中正『湯川博士とアインシュタイン』（岩波書店、2008）p.186。
- 10) 見田石介『見田石介著作集第二巻』（大月書店、1976）p.156。

（そうかわ・よしひろ：京都支部，生命科学）